

第III部 寄稿：学校現場からの視点

読者の意見

<p>読者の意見</p>	<p>読者の意見</p>	<p>読者の意見</p>
<p>読者の意見</p>	<p>読者の意見</p>	
<p>読者の意見</p>	<p>読者の意見</p>	
<p>読者の意見</p>	<p>読者の意見</p>	

新教育課程展開の資料としての活用を

川崎市立王禅寺小学校教頭 芳野菊子

1. 本調査の意義

機を捉えての企画であろうが、他でもないこの平成元年度にこのような調査が実施されたということは、極めて意義の深いことと、まずその着眼に敬意を表したい。

平成元年は21世紀の社会に生きる子どもたちのあるべき姿を目指して、教育課程の改訂が行なわれ、新しい学習指導要領が告示された年であった。

今回の教育課程の改訂のキーワードともいべきものの中で、読書指導にかかわるものとしては、自己教育力の育成、社会の変化への主体的な対応、個性重視の原則、国際化への対応、文化と伝統の尊重等を挙げることが出来る。

まず第1の自己教育力の育成であるが、読書は本来自発的に行われる行為であり、自ら学ぼうとする意志に支えられるものである。自己教育力は自発的な読書行為を啓発することで、その原動力としての意志の力を培うことができる。

21世紀を待つまでもなく、現在既に情報化の時代に突入しているということが出来る。膨大な情報により世の中は刻々と変化を続けており、その変化に対応してよりよく生きていくためには、自分に必要な情報を適切に捉え、それを活用していく力をつけておかなければならない。情報をもたらす媒体は多様化してきているが、伝統的な

情報媒体の基本は書物である。図書館は情報のセンターであり、その利用指導は、情報処理の教育そのものであると言ってよいであろう。

これからは教科の学習の中にも、図書館の多様な書物を活用して行なう発展的な学習場面を設定することが必要である。個性に即して学習し、それぞれの個性を伸長することができる。こうした幅広い読書指導を通して国際化、伝統文化の尊重という課題も合せて実現していくことができる。

このような課題を児童の中に下ろしていくためには、児童の実態に対する深い理解が必要である。この調査は、まことに時宜を得たものであり、大いに活用していきたい。

2. 調査にみる子どもの実態

調査の結果に基づいて、これからの読書指導に当たって考慮していきたいことがいくつかを拾い出してみよう。

① 若者の活字離れが問題として取りざたされる昨今ではあるが、この調査結果に見る限り、それほど心配することはないようにも思われる。ほとんど本を読まない子どもは全体の4分の1程度で、テレビのなかった時代に比べて特別多いということはないと思われる。

問題は今読んでいる子どもたちが、近い将来本を読まない若者になっていく

であろう兆候が、6年生になると5年生のときよりも本を読まなくなるという調査結果に表れていることである。

よい読書習慣をどのように持続させていくかが指導上の課題である。読書に親しんでいる子どもほど自分から読んでいる、という分析も、当然といえば当然だが、その事実を積極的に捉えるならば、読書に親しむ機会を学校生活の中により多く設ける配慮もその方法の一つと考えてよいであろう。

② 本の所有状況は物語類、図鑑類、マンガとなっているが、それはそのまま世の中にある書籍の絶対量の段階である。これは、学校図書館の類別蔵書量を検討する際の指標にすることができる。

③ 図書館の利用状況を見るに、「ほとんど行かない」が6年生では約50パーセントを占めている。地域の図書館の場合その立地条件にもよるので、一概にその少なさを問題にすることはできないが、学校図書館の場合、この数字は図書館の利用指導の実態そのものを物語っているといえることができる。

しかも、学習内容がより高度になり、知的関心も高まるはずの6年生の方が、5年生よりも10パーセントも利用しない子どもが増えているという実態はどう解釈したらよいのであろうか。5・6年生共3・4年生のころの方がより多く利用していたと回答していることと合せて考えると、打つべき手立てや対象が見えてくるのではないだろうか。

④ 学校図書館で読む本の上位は物語類、学習マンガ、推理小説が占めていて日常の読書傾向とあまり変らない。

国語科における読書指導は別として、社会科、理科など他の教科の学習の発展としての利用指導が積極的に進められているならば、2位、3位の書物の種類は違ってくるのではないだろうか。情報処理の学習としての図書館の利用指導について検討することの要を示唆する資料と読むこともできる。

⑤ 読書においても高学年になると性差が表れるのは興味深いことである。全般に読書への関心は女子の方が高いが、物語類を除いてみるとむしろ男子の方が比率の数値は高い。男子は歴史、伝記などに代表されるノンフィクションを好む傾向がある。性差、さらには個の特色の表れる時期であるだけに、読書指導では教科指導の中では十分に果たし得ない個への適切な対応が可能になる。

⑥ 学習マンガへの子どもたちの関心は高く、男子では学習マンガが好んで読む本の1位を占め、女子の場合でも2位になっている。これに一般のマンガを加えると全体でも1位になるだろう。小遣いで買う本ではマンガの類の方が多いいから推測できる。

マンガを否定することよりも、マンガを契機としてマンガでない本に関心が向くような指導の方法を考えることのほうが实际的であろう。

3. 調査結果を参考にした読書指導

情報化への対応を課題として、これからの読書指導のありかたを内容と場の観点から考えてみよう。

(1)国語科での読書指導

新しい学習指導要領では、「理解」の項に読書指導について触れた指導事項が示されている。

5年生では「読書を通して考えを深めるようにする。」と、6年生では「適切な読み物を選んで読む習慣をつける。」と示されている。

5年生でいう「考えを深める読書」は子どもの恣意に任せておくだけではいけない。読みを深める読書に導くには、国語の授業の中に読書に発展させる場を設定することも必要である。例えば、5年生の国語の教材に「三人の旅人たち」(光村図書)という作品がある。この作品の学習を通して、三人によって象徴される社会の姿、三人三様の生き方、というような視点で考えさせるのである。広く考えれば、異なった個性をどう調和させるか、自分の生き方をどのように貫くかということである。そのようなことを広く捉えて考えさせるために意図的にそのよりどころとなるような書物に出会わせるのである。5年生ならば『十五少年漂流記』などを薦めて、作品の中の同年代の子どもたちの小さな社会とそれぞれの生き方などに視点を移して考えさせ、読書会など意見交換の場を設けるなどするのもよいだろう。

また、6年生の「適切な読み物」とは一般論としての良書というだけではなく、それぞれの児童が自分に適した本を選ぶことができるということである。男子の場合2割程度の子どもが「言われて読む」という自発的でない姿勢を示して

いるが、基本になる意欲をもたせることが先決である。

指導書には「読書意欲を高め、日常生活において児童が読書活動を活発に行なうことを促していくようにして、児童の読書力が向上するようにすることである。」と解説されている。

6年生になると、特に男子は興味関心の傾向もかなり色濃く表れてくるので、それを伸張する方向で書物に引き寄せることができる。そのためには教師が子どもに好まれる良書の情報をたくさん持っていなければならない。情報は子どもから得るのがよい。大勢の前で話す力をつける学習と合わせて、おもしろくてためになった本の紹介、という場を毎日の学習の中に帯単元として設定することにより、新しい情報を容易に得ることができる。

(2)読書指導の場としての学校図書館

読書力をつけるための基礎・基本の指導は、国語科でなされるが、日常化への導きは学校教育活動の全体を通して行なわれなければならない。

特に利用に関する指導は、特別活動の中の学級活動でなされることになっている。利用指導が成果を上げるためには、子どもの自発的な読書が促されるような図書館のあり方が問題になってくる。新築や改築の場合には、オープンスペースの閲覧室が、学校の中心部に位置するように設計する、というように物理的な条件を整えることも大切なことである。

また、子どもを図書館に近づけるといっただけでなく、図書館を子どもに近づけ

るという発想も必要である。教科学習を発展させるような方向で利用する場合には、学習意欲の高まったところで関係図書を一室教室に持ち込んで利用させるというような方法をとって本との距離を縮めることもできる。このようなことは制度や予算の制限の中でも、図書館担当者との協力をとって可能なことである。

このような配慮をすることによって、半数を占める「図書館にほとんど行かない」という子どもはなくなるであろう。

4. 今後の調査への期待

本調査からは、これからの読書指導の方向を探る上で多くの示唆を得ることができ

る。それをよりどころに読書指導、図書館の利用指導を実践した場合、さらに次のような実態が知りたくなるのではないかと考える。

この種の調査は今後も継続されると聞くので、次回での検討に期待したい。まず、この前段階としての低、中学年及び、この後に控える中学生の読書の状況。またよく読まれるということとは別にそのときどきの子どもたちの中で話題になる本及び作者やその理由。テレビ、映画など映像の視聴を契機として読んだ本。マンガで読んでから原典にもどったような場合の本。学習資料としての図書利用の実態などである。

こうしたことからの実態を踏まえることによって国語科における読書指導、学級活動の時間における利用指導等を、いっそう効果的に展開することができるのではないかとと思う。